

# 県教委が主導し、 小・中・高の指導に連続性を持たせる

## 福井県

中学生・高校生、そして英語科教員の英語力において、国の目標に到達した割合が、いずれも全国1位<sup>\*1</sup>だった福井県。その要因の1つには、福井県教育委員会が主導し、小・中・高の英語教育改革を進めてきたことが挙げられる。今年度には小学3年生からの英語教育を県内全公立小学校で始め、2018年度高校入試では、話す力を評価するため、民間の資格・検定試験を活用するなど、小・中・高の連続性のある指導を推進している。

### 福井県 プロフィール

◎日本列島のほぼ中央、日本海側に位置する。越前ガニやコンヒカリなどの特産品、東尋坊や永平寺などの名所・旧跡、恐竜博物館を有し、繊維・機械・眼鏡産業が盛ん。「全47都道府県幸福度ランキング」（日本総合研究所編）で3回連続幸福度日本一。2018年度、国民体育大会、全国障害者スポーツ大会を開催。

人口 約77万4000人 面積 4,190.51km<sup>2</sup>  
公立学校数 小学校190校、中学校75校、高校27校、特別支援学校11校 児童生徒数 約7万9600人  
電話 0776-21-1111 (代表)  
URL <http://www.pref.fukui.lg.jp/kyouiku/education/cat2001/index.html>

## 福井県教育委員会の施策

### 高校だけでなく小・中学校とも深くかかわり、 市町教委の実践を支援

#### 改革への姿勢

#### 県教委が改革の方針を示し、 市町教委と連携

2017年に行われた文部科学省「英語教育実施状況調査」において、福井県の中学3年生、高校3年生、そして中学校・高校の英語科教員が、国が示したCEFR<sup>\*2</sup>の目標に到達した割合は、いずれも全国1位<sup>\*1</sup>だった。さらに、中学・高校生については、英語力の対前回上昇率も上位に入った。そうした英語教育改革の成果が見られる福井県では、座談会（P.6～9）で語られた通り、2015年に策定した「教育振興基本計画」の基本方針の1つに「『使える』外国語教育の推進」を掲げ、小・中・高で様々な施策を推進している（図1）。佐々木栄秀学校教育幹は、次のように説明する。

「本県の1学年の児童・生徒数は約7000人で、英語科教員は中・高の合計で600人ほどです。自治体数も17市町とそれほど規模が大きくありませんから、県教委が方向性を示し、市町教委の実践を支援するという方針で、高校だけでなく小・中とも深くかかわり、小・中・高の指導が一体化するよう改革を進めています」

#### 小学校英語の教科化への施策

#### 全授業の指導案を作成し、 現場の不安と負担を払拭

そうした姿勢がよく表れているのが、小学校英語の教科化への対応だ。文部科学省で教科化に向けた議論が始まると、県教委は教科化を見越して小学校での英語教育の検討に着手した。義務教育課の尾形俊弘参事は



学校教育幹  
**佐々木 栄秀**  
ささき・えいしゅう

福井県教育庁高校教育課参事、福井県立藤島高等学校校長、同教育庁高校教育課長等を経て現職。



義務教育課  
参事（外国語教育）  
**尾形 俊弘**  
おがた・としひろ

福井県教育庁義務教育課指導主事、福井県内の公立小学校教頭等を経て現職。

次のように振り返る。

「『教科化が決定してから実施方法を議論するのでは遅すぎる』という見解の下、県教委で議論を始めました。他教科と同じように学級担任が授業を行うのか、英語の専科教員を配置するのか、また、通常授業に組み込むのか、モジュールを取り入れるのかなど、それぞれの利点と課題を比較しながら、小学校で子どもの英語力を伸ばすための最善の方法を探りました」

そして決まったのが、担任をT1

\*1 文部科学省「平成29年度 英語教育実施状況調査」の結果によるもの。福井県の調査結果は、中学3年生では、到達目標のCEFRのA1レベル以上の割合が62.8%、高校3年生では、到達目標のCEFRのA2レベル以上の割合が52.4%、教員の英語力では、CEFRのB2レベル以上の英語力を有すると思われる英語科教員の割合が、中学校は62.2%、高校は91.3%と、いずれも全国1位だった。

とし、コミュニケーションな活動中心の授業を行うという方針だ。実施に向けた課題を市町教委から聞き取り、担任を対象とした研修や、全210時間分の指導案の作成などを行った。

「県が掲げた方針の下、現場が実践できるように、不安と負担の両面を軽減する責任が教委にはあります。また、教員の英語教育に対する意識の違いが指導の差とならないよう、統一した指導案が必要でした」(尾形参事)

指導案は、義務教育課外国語教育グループの指導主事7人を中心に、大学教員の協力も得て作成した。運用を開始した今年度は、各地区の研究指定校が指導案を基にした授業を公開し、指導力向上を図っている。また、県の指導主事が各校を訪問して、活用状況と課題を聞き取り、指導案の改訂に生かしている。

「移行期間中は子どもの英語学習歴が毎年異なるため、指導案も毎年見直し、子どもの英語力に応じた指導案を提供していきます」(尾形参事)

### 中学校での指導改善

## 高校入試改革を進め、中学校での学習を評価する試験に

小学校での英語の学習状況が大幅に変わることを受け、一層重視するのが小中連携だ。県教委では、各地区内で小・中の互見授業を定期的に行い、子どもの英語力の把握や、指導力の研鑽<sup>けんざん</sup>に生かすよう推奨している。

また、中学校の指導改善に結びつく高校入試について、福井県では、1960年から高校入試の英語でリスニングテストを実施しており、各中学校もリスニングの指導に力を入れてきた。現在、リスニングテストは60分中15分、100点中30点配点で、英文を読む速度は、ネイティブ・スピーカーが普通に話すぐらいの速さだ。

「中学校での到達目標やそれに続く

### 図1 福井県「小・中・高が連携した英語教育の進め方について」

- |        |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
|--------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 小学校    | <p>◎小学校の英語教科化に向けた指導案および県独自の教材を作成</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>指導案(日・英)および評価テスト(スピーキング、リスニング、筆記テスト)、副教材の作成</li> <li>教材の活用方法や評価に関する研修を実施(2017～18年度800人)</li> <li>英語を教えるヒント集(日本語と英語の比較など)の作成・活用</li> <li>全校で授業公開を実施(指導主事が訪問指導)</li> </ul> <p>◎小学校教員の研修を中核教員だけでなく、担任教員に拡充</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>各校のリーダーを対象とする中核教員研修(2015～16年度191人)</li> <li>5・6年生担任研修(2016～17年度400人)</li> <li>発音指導法・テレビ語学番組活用研修(小学校1～6年生担任または管理職。2016～17年度800人)</li> </ul> <p>◎退職教員、地域人材による外国語活動の支援</p>                                                                                                                                                                                                                        |
| 中学校・高校 | <p>◎話す力をつける授業、校内でのスピーキング評価とともに民間の英語の資格・検定試験を活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>中学3年生と高校1～2年生に、民間の英語の資格・検定試験受検料を補助</li> <li>話す力を含めた4技能評価のため、2018年度高校入試で、民間の英語の資格・検定試験の結果を加算する方式を導入。2019年度以降、スピーキングテストを導入予定(2018年度試行実施)</li> </ul> <p>◎ALTの活用(ALTを増員。2016年度103人→2017年度111人)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>放課後等に生徒とALTが日本語と英語を教え合う活動を設定</li> </ul> <p>◎生徒が英語を使う機会の拡大</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ICT機器の活用による海外の高校生との交流、英語ディベート大会参加校の拡充、海外語学研修の実施(15日間、2年生100人)</li> <li>「ふるさと福井のよさ」を中学生や高校生が自作したPRカードを使い発信(2016年度、福井商業高校、勝山北部中学校などが実施)</li> </ul> <p>◎福井県版オリジナル英語教材の配布</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>高校1年生(普通科)に対し『Fuku(福)-English』を、高校1年生(職業系)に対し『ワードオーダードリル』を配布</li> </ul> |

\*福井県教育庁提供資料を基に編集部で作成。

高校の学習内容を考え、高校入試の問題も変化させています。従来から、文法問題と英文和訳問題は出題しておらず、ここ数年では、学習指導要領に沿って長文問題の語数を700語まで増やしました。そして、知識活用力・情報分析力を測る記述・論述型の問題を拡充し、自分の意見や考えを書くなど、思考力・判断力を問う出題としています。中学校には、自分の意見や考えをやり取りする授業を期待しています」(佐々木学校教育幹)

ALT<sup>\*3</sup>は、各中学・高校に1人(大規模校では2人、すべて県費で雇用)を配置して、子どもがネイティブの英語に触れられる機会を増やした。

「多くの中学校が英語で授業を進めており、4技能のバランスのよい指導が行われています。そうした生徒の学習を適切に評価するために、高校入試でスピーキングテストを導入することを視野に入れ、『GTEC』<sup>\*4</sup>で試行テストを行いました(P.9図3)」

(佐々木学校教育幹)

中高連携では、「県英語研究会」の存在も大きい。公立・私立を問わず県内の中・高の英語科教員全員が所属する自主研究団体で、毎年秋に研究大会を開催するほか、授業や教材の研究及び実践報告などを行う。

「教材等の作成の際には、学校を超えて議論をし、そこで出た意見を自校に広めるといように研鑽を積んでいます」(尾形参事)

県全体で英語教育改革を進めるようになり、県教委の指導主事の小・中学校訪問は、珍しくなくなった。県教委と市町教委の連絡協議会では、県の指導主事が模擬授業を行い、目指す授業像を共有している。

「社会で使えるような英語力の育成に向け、小・中・高が連続性を持った指導でなければなりません。これからは県と市町、学校が連携し、子どもたちの成長を支えていきたいと思えます」(佐々木学校教育幹)

\*2 Common European Framework of Reference for Languages (ヨーロッパ言語共通参照枠)の略で、語学のコミュニケーション能力のレベルを示す国際標準規格。レベルはA1、A2(A:基礎)、B1、B2(B:自立)、C1、C2(C:熟達)の6レベルがあり、C2が最も習熟度が高い。\*3 Assistant Language Teacherの略で、外国語指導助手のこと。小・中・高校などの英語の授業で日本人教員を補助する。\*4 ベネッセコーポレーションが提供する英語のスコア型テスト。「読む」「聞く」「話す」「書く」の4技能別に絶対評価を行う。スピーキングテストはタブレット端末を使用して行われるため、学校内での集団実施も可能。

# マインドマップで考えを可視化してから やり取りを行い、英語での即興力を高める



◎ 1948(昭和23)年開校。校訓は「自律」「敬愛」「創意」。学校教育目標に「総合的な学力を高く、自己実現を図れる生徒を育成する」を掲げ、地域とかかわる力や夢を持ち頑張る力を育む。

校長 八田善憲先生  
生徒数 605人  
学級数 23学級(うち特別支援学級3)  
電話 0778-23-1411  
URL <http://school.city.echizen.lg.jp/takefu1/>

## 英語で授業を行うための工夫

### 英語の説明とともに、ロールプレイなどで視覚的に伝える

越前市武生第一中学校は、2016年度から2年間、福井県教育委員会の「主体的・対話的で深い学び」に関する研究指定を受け、全教科でそうした指導のあり方を研究してきた。八田善憲校長は研究成果をこう語る。

「ペアやグループでの話し合いによって、自分の考えを述べ、多様な考えを知り、より発展的な考えに結びつくような授業を展開してきました。そうした学び方が生徒たちに定着し、今年度は各教科の特性に応じた深い学びを追究しています」

英語科では、そうした方針を踏まえつつ、福井県中学校教育研究会英語部会の研究主題を基に、越前市の部会が掲げた「互いに気持ちや意見を伝え合い、考えを深めようとする生徒の育成」を目標として指導改善を進めている。

英語科主任の中村香織先生は、授業内容に「話す」「書く」など、毎回重点を置く技能を設定した上で、1時間の中で生徒が4技能をすべて使うよう活動を組み立てている。

「英語で外国人とコミュニケーション

ンをとるためには、即興力が必要だと考え、教員ができるだけ英語で授業を行い、他者とやり取りする活動に力を入れています。同時に、自分が話したり書いたりした英文が正しいかを判断するためには文法力が重要だと考え、文法指導も丁寧に行っています」

それでは、英語で授業を行うための工夫を見ていこう。

①到達目標と活動の手順を最初に示す  
冒頭に授業の到達目標とその達成に向けた活動のステップを示し、全体像をイメージさせる。そして、活動ごとに具体的な手順を説明。そうすることで、説明時間が短くなり、生徒は英語でも理解しやすくなる。

②ロールプレイなどモデルを見せる  
ロールプレイやジェスチャー、板書を活用して伝える。また、例えば、未習語が登場した際には、すぐに日本語で意味を伝えず、その意味が連想できるようなモデルとなる例文を伝えるようにする。例えば、capital という単語の場合、「Tokyo is the capital of Japan.」と聞けば、その意味を捉えることができる。ただ、生徒の様子に応じて、無理せず日本語も使う。

③ALTにも同様の工夫をしてもらう  
ALTにも①②を説明し、ALTの英語を教員が訳さないようにする。



校長  
八田善憲  
はった・よしのり  
2016年度から現職。



指導教諭  
中村香織  
なかむら・かおり  
英語科主任。3学年担任。英語教育推進リーダー。福井大学教育学部附属中学校\*5等を経て、2012年度から現職。

「生徒の英語力を把握しているのは私たちであり、それをALTに説明し、生徒が理解できる英語を使ってもらうようにしています」(中村先生)

日頃から教員・ALT双方の英語を聞くことで、生徒は身構えなくなり、教員にも英語で返答するようになる。

「英語をすべて理解できなくても大意がつかめればよいと、生徒には伝えています。授業で英語を聞き続けることが、何よりもリスニングの学習になります」(中村先生)

## 即興力を育む指導

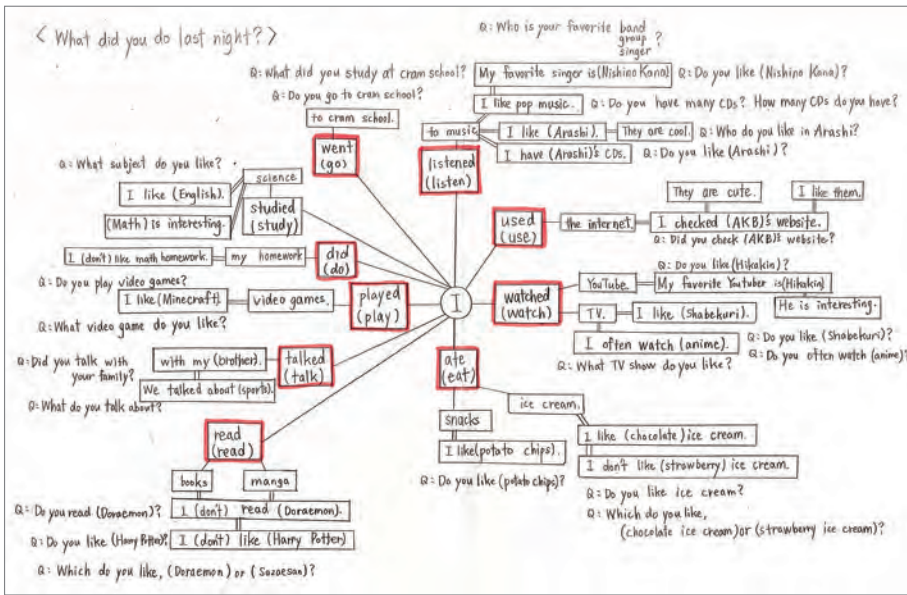
### マインドマップを活用し、英語で文を組み立てながら話す

中村先生が英語での即興力を育むために活用するのが、マインドマップ(図2)だ。トピックについて書き出した考えをマインドマップに整理し、そのマップを見ながら他者とのやり取りを繰り返す。すると、次第に英語で文を組み立てて話すことに慣れ、マップを見なくてもやり取りが続くようになると、中村先生は語る。

「一続きの文として提示すると、生徒は意味を考えずにそれを読み上げ、文として暗記しようとしています。一方、思考の流れが視覚化されているマインドマップでは、それを見ながらであっても、自分で単語をつなげて文に

\*5 現在は、福井大学教育学部附属義務教育学校。

図2 1年生の2月に行った過去形の単元で使用したマインドマップと活動の手順



「昨日の夜にしたことは何か (What did you do last night?)」をトピックにやり取りする活動を設定。マインドマップは前時までの「書く活動」で作成した。その手順は、クラス全体でトピックについて考えを共有し、教員がそれをマップの形式で思考の流れとして板書に整理した(左図)。本時のやり取りの活動は次の手順で進めた。

- ① マインドマップを見ながら、昨夜したことについて言う練習を、相手からの質問を想定しながら行う。
- ② ALTと教員が対話の流れに応じて即興的にやり取りをする様子をロールプレイで見せる。自然なやり取りにするために心がけるべきことをペアで話し合い、発表する。
- ③ マインドマップを見ながらペアでやり取りをする。途中で教員はフィードバックを行う。
- ④ マインドマップを見ないでペアでやり取りをする。
- ⑤ 全体の前で、代表する生徒がやり取りをする。

\* 越前市武生第一中学校提供資料をそのまま掲載。

して話します。同じ例示でも、マインドマップでは英語で考えながら話す練習を積めます」(中村先生)

図2は、1年生2月に行った過去形を学ぶ単元で使ったマインドマップだ。中心にある主語(I)の周りにはある赤で囲んだ部分が動詞で、その中から1つを選び、さらに周辺にある目的語も1つ選んでそれらをつなげれば、文として発言できる。また、続けて質問できる例文も示してあり、やり取りのヒントとなる。

「生徒は同じマインドマップを見ながらやり取りをするので、相手の発言や質問を想定でき、安心して練習を積めます」(中村先生)

この授業の後半では、生徒はマインドマップを見ずに話し、代表の生徒とALTとのやり取りでは、ALTの質問に答えて終わりではなく、その発言内容に合わせて、生徒からALTに対して質問をし直した。

「私の想定以上に即興性のあるやり取りをする姿を見て、生徒の限界を教員が決めつけてはいけなと改めて感じました」(中村先生)

1年生からマインドマップを活用してきた生徒は、2年生ではそれを

用いなくてもスムーズにやり取りができるようになってきたという。

同校の英語科には教員6人、ALT2人が在籍しており、全教員でワークシートを共有することで、指導の統一を図る。また、生徒同士のやり取りは、全学年で週1回以上、授業の冒頭10分間でも行うようにしている。

### パフォーマンステスト・定期考査

#### 定期考査は、大意をつかむ問題や知識を使って解く問題に

評価には、指導に対応させて、全学年でパフォーマンステストを導入。スピーキングテストは学期に1回、インタビューテストかスピーチテストのいずれかを行う。さらに、音読テストは、長期休業中の音読課題の成果発表として、長期休業明けに行う。2018年度は、評価を教員とALTが協力して行うようにした。

「生徒たちは正確な発音を意識して練習するようになりました。ALTには発音ができなかった単語を評価シートに書き出してもらい、その後の学習につなげています」(中村先生)

ライティングテストは、定期考査で

自分の考えを書く記述式問題を出す。

いずれのテストでも事前にループリッックを示し、生徒に目標を意識させる。そして、テスト後、ALTにテストの感想を書く際、できれば英語で書くよう伝える。ALTとのやり取りがねらいであり、ALTはコメントを返すのみで、添削はしない。

定期考査は、授業内容の定着度を測るとともに、変化しつつある福井県の高校入試問題にも対応できるよう工夫している。

「英文和訳や知識を書き出すだけの問題は控え、課題文の大意をつかんでいないと答えられない問題や知識を活用して解く問題を出すようにしています」(中村先生)

なお、越前市でも小中連携を進めており、同校も校区内の小学校との研究会を実施。英語教育についても、それぞれの指導方法や子どもの英語力などの情報を交換し、授業の相互参観も定期的に行う。

「自分の英語が相手に伝わると、生徒はとてもうれしそうな顔をします。その喜びを大切に、生徒が授業の前後で自身の成長を実感できる授業をしていきたいと思います」(中村先生)